

# 丹沢の植物とその生育環境

神奈川県には3,477種の維管束植物が生育しています（神奈川県植物誌調査会 2018）。丹沢にはその半分の約1,700種があります。そのうちの200種あまりが希少植物です。

植物はそれぞれの生理的・生態的特性に応じて、様々な環境に生育しています。生育環境の幅が狭く、かつその環境が限られていると、希少植物になりやすいです。丹沢の主な生育環境としては次のようなものがあります。



丹沢の標高1,300m以上のブナ林は傾斜が緩く、富士山からの火山灰が厚く積もっており(図1)、夏には霧がかかりやすいため、湿潤な環境となっています。下層には高茎草本が、樹幹にはマツノハマンネングサなどの着生植物が生育しています。標高1,300m以下のスズタケを伴うブナ林とは相観も種類構成も異なります(図2)。

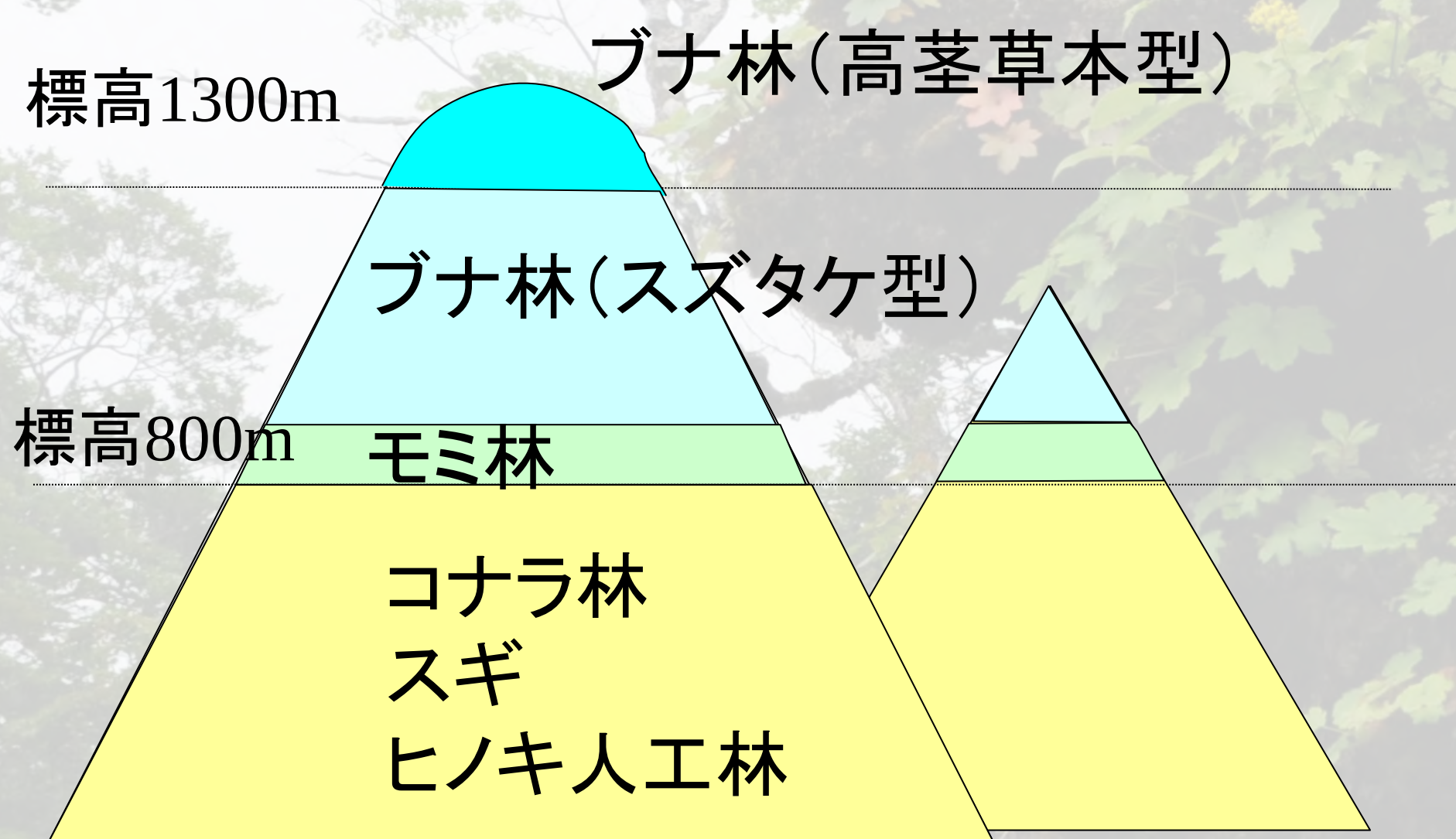


図1 丹沢の垂直分布の模式図



図2 丹沢の2タイプのブナ林

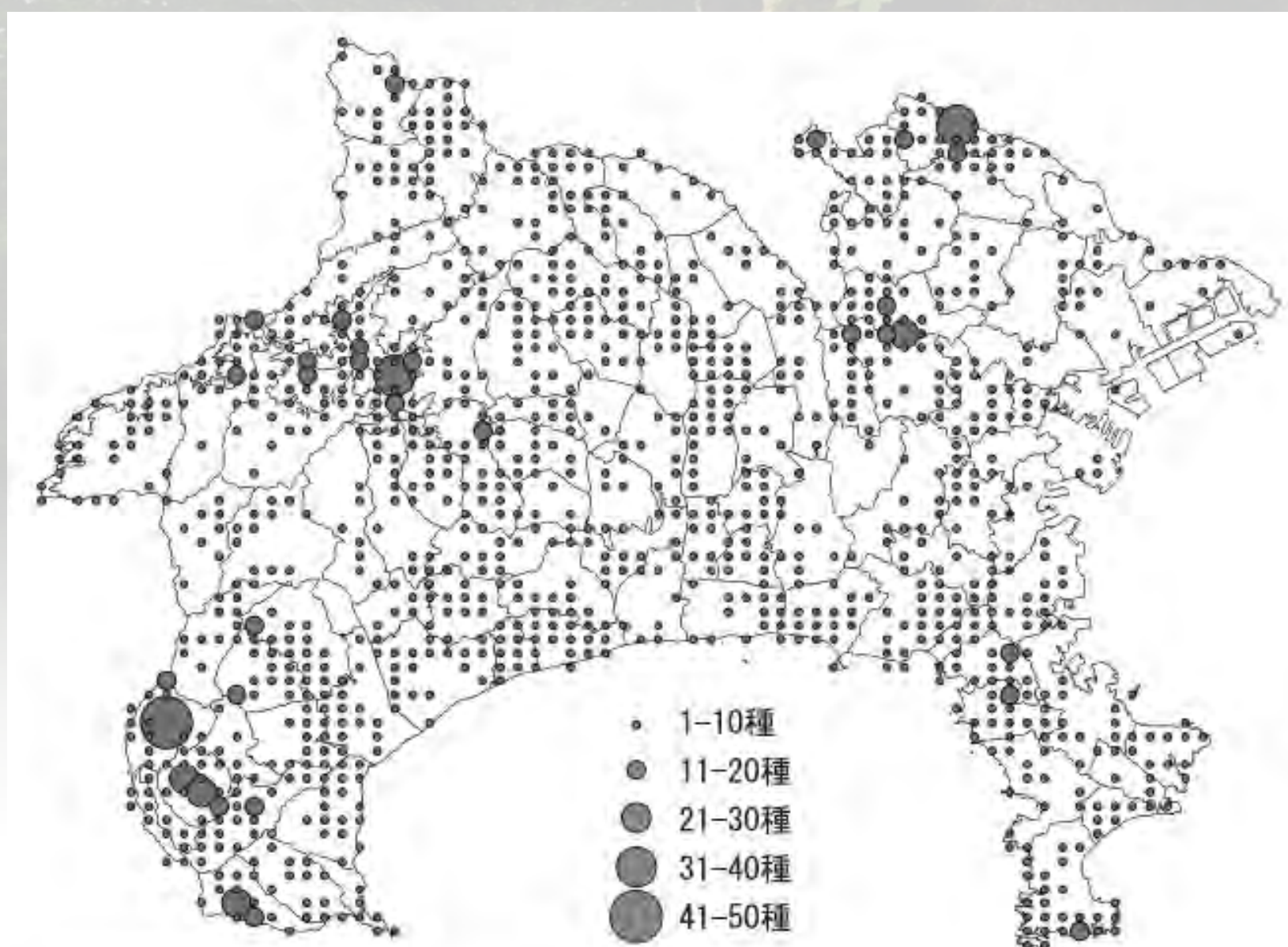


図3 希少植物が集中して分布する場所  
(田中2005より)

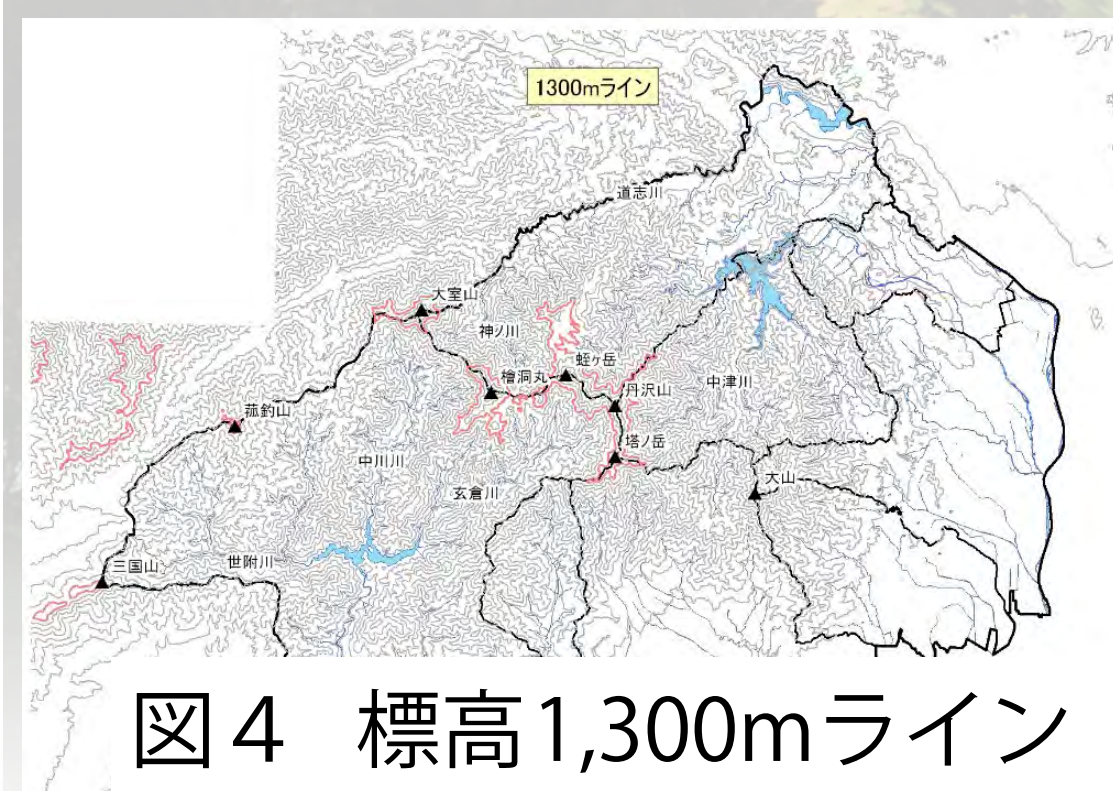


図4 標高1,300mライン



図5 特別保護地区の範囲

図3と図4から、標高1,300m以上の山岳に希少植物が集中していることがわかります。これらの地域の多くは丹沢大山国定公園特別保護地区です(図5)。



## 丹沢の標本を基に学名が付けられた植物

生物は種ごとに学名が付けられています。学名は世界共通で、属名＋種小名（＋命名者）からなります。お米のイネは和名であり、その学名は *Oryza sativa*（オリザ サティバ）です。学名をつける際にその根拠となる「基準標本」が選定されます。基準標本の採集された産地が「基準産地」です。丹沢を「基準産地」として学名がつけられた植物には以下の種があります。



エビラシダ（ナヨシダ科）

*Gymnocarpium oyamense* (Baker) Ching  
1877年に丹沢の標本をもとに最初に学名がつけられた種の一つ。大山が基準産地であり、種小名に「大山産の」とつけられている。



サガミジョウロウホトトギス（ユリ科）

*Tricyrtis ishiana* (Kitag. & T.Koyama) Ohwi & Okuyama  
1957年に石井初男氏が丹沢山中で発見。世界で丹沢にしかない固有種で、県絶滅危惧 I B類。



イワシャジン（キキョウ科）

*Adenophora takedae* Makino  
1905年に武田久吉氏が玄倉川上流の諸子平で発見し、1906年に牧野富太郎氏が学名をつけた。丹沢の植物のなかで、日本人が最初に学名をつけた記念すべき種。



タンザワサカネラン（ラン科）

*Neottia inagakii* Yagame, Katsuy. & T.Yukawa  
2007年に稲垣清秋氏により発見され、学名がつけられた。県絶滅危惧 I B類。主にモミ林に生育している。

※他にウラハグサやタンザワヒゴタイ、タンザワウマノスズクサ、タンザワイケマなどが丹沢を基準産地として学名がつけられました。



# 丹沢で希少植物たる所以

多くの植物の中で希少植物がある理由には以下のようなものがあります。

## ① 分布が局限(下図参照)

(1) 地域固有種: **フォッサマグナ要素**※1

(2) 分布の周縁: **襲速紀要素**※2、**寒地性(北方系)**、**暖地性(南方系)**

(3) 全国的な稀産種

## ② 生育環境が特異: 樹幹、岩壁、草原など

## ③ 存続を脅かす要因: 盗掘、開発、植生遷移、シカ影響など

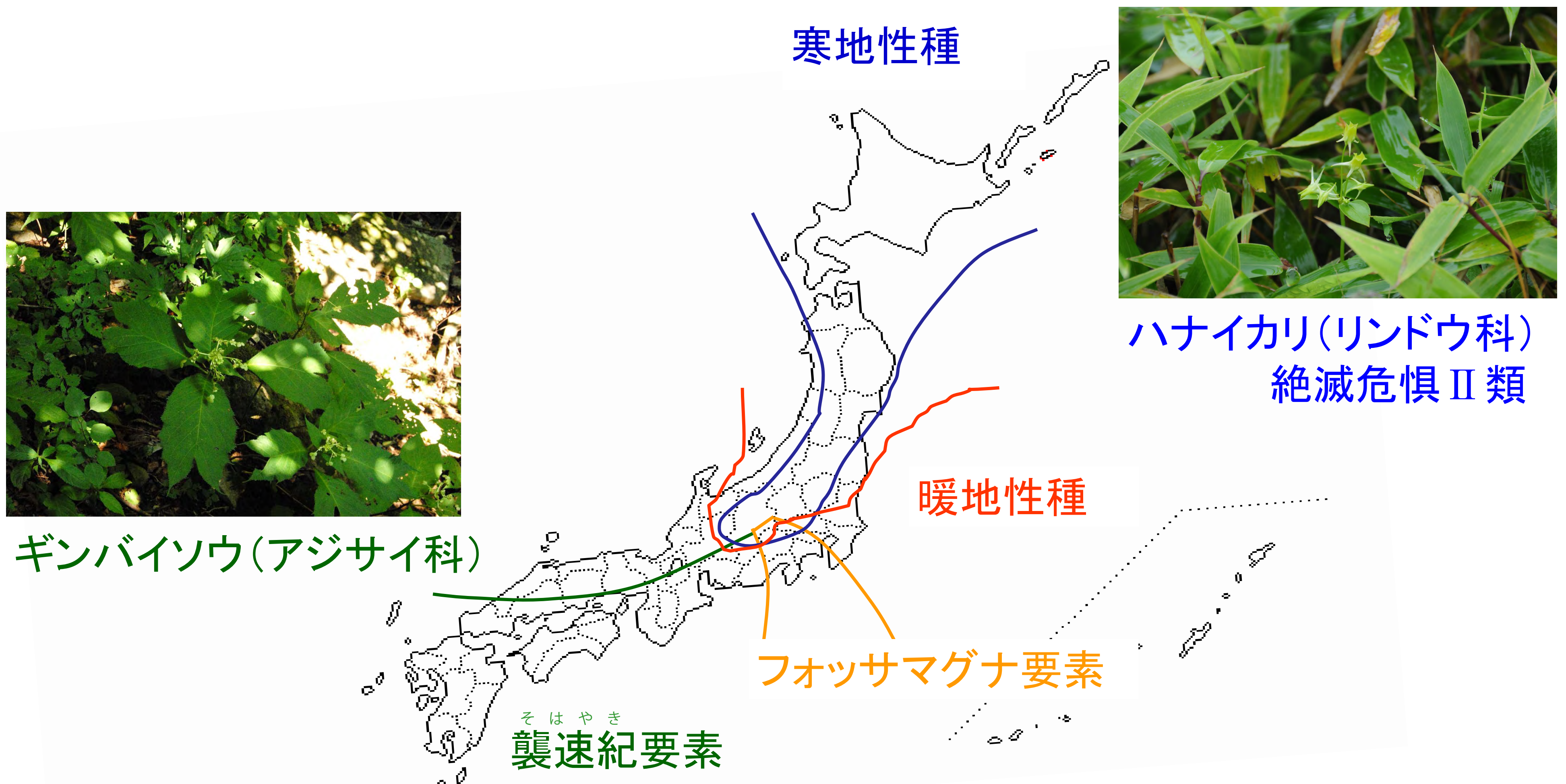


図 植物の主な分布類型 (他にもあり)

※1 地質学でいうフォッサマグナ(糸魚川-静岡構造線)の南部を中心に分布するタイプ

※2 九州南部と四国、紀伊半島を中心に分布するタイプ。襲速紀とは、熊襲(九州南部の古名)と速吸の瀬戸(東予海峡)、紀伊の國(和歌山県と三重県南部)をくっつけた造語。

これらのうち①と②はその種がもつ生態的特性です(元々もっているもの)。県内の希少植物の多くは①と②に該当するものが多く、それに加えて③の要因が影響している場合がほとんどです。

次のポスターから、①と②の代表的な希少植物を紹介します。また③については、15のポスターでシカ影響に対する保全対策を紹介します。